

学会を次世代に引き継ぐために



早 下 隆 士

筆者は一昨年、分析化学会の副会長に就任し岡田前会長とともに、分析化学の将来構想ワーキンググループに参画した。1952年の創立以来、およそ70年にわたる、学会を引き継ぎ、次世代へ渡す世代の一人として、また一研究者として、より一層の学会の充実、その先にある国内外へのスムーズな知識、技術の還元を明文化し、共有することは、緊急の課題であると考えている。

先のワーキンググループでは、(1)「分析化学」の位置づけを明確にして、学会の内外に発信することの重要性、(2)学会の存在意義として、国のプロジェクトなどに学会構成員がアクセスしやすい環境や機能を提供する必要性、および(3)年会、討論会の中で、産業界シンポジウム等を利用して産官学のマッチングを行う情報交換の場を作る重要性などを提案した。(1)および(2)については、新しく更新された本会ホームページにその機能を集約し、新広報委員会が中心となったタイムリーな情報発信を期待したいと考えている。また(3)については、理事会内に新たに産官学連携委員会を設置した。この委員会の主な目的は産業界シンポジウムを、産業界研究者、技術者の交流、発表の場から、一歩進んだ産官学連携のためのジョイントの役割とすることである。まず手始めとして、昨年千葉大学で開催された第68年会において、実行委員会とともに「産官学交流カフェ」を企画した。研究室を主催する大学教員によるシーズ研究紹介やリラックスした雰囲気懇親会。このような場があることで、より一層産業界と大学間の交流は活発に進むであろうし、ひいては学会員の減少にも歯止めがかかることも期待している。また、学会員の構成の多様化は、産業界の発展にも大いに寄与するものと確信もしている。

筆者は、今年度から内山会長のもとで筆頭副会長を務めているが、本学会の関東支部長も兼任している。関東支部においては、上記の活動が、やや先んじて行われ、成果を上げつつある状況である。関東支部が主催する4コースの機器分析講習、2コースの基礎分析講習の事業運営は、多くの産業界メンバーの積極的な協力のもと開催され、これは今後の産業界、大学間の連携のよきモデルとなるべく、今後も双方努力を続けていきたいと考えている。

今後の課題としては、若手間の産官学連携の問題も見据えている。今後の学会を率いる若手の、さかんなる交流とそこから生まれるボトムアップ型の改革案は、今後の分析化学会のさらなる発展のために重要な提言となるであろう。

〔Takashi HAYASHITA, 上智大学理工学部, 日本分析化学会関東支部長〕